



愛隣幼稚園.....

園だより

.....18.11月号

子どもが話を聴かないといいますが

「聞く」と「聴く」同じようですが、その時の気持ちの傾け方が違うので異なる漢字が使われています。幼稚園の避難訓練の日。桜の木の下に集まった子どもたちに私が話を始めると、小さなざわざわはピタッと止みその視線が集まります。「話を聴く」という場面での子どもたちが集中する姿に、私はいつも驚かされます。子どもたちには人気のない（あそび時間が短くなる・話が長い等の理由があるようです）礼拝の時間でも、子どもたちは夢中でお話を聴いています。保育室では先生たちが毎日、絵本を読んでいます。この時も子どもたちは先生が開く絵本とお話しに集中しています。間話も頭を寄せてよく聴いて考えています。愛隣の子どもたちは“聴く”力をもった子どもたちです。

入園してしばらく、子どもたちのコミュニケーションは“話す”こと（自己主張）が中心になります。いいのです。まずは自分のことを相手に伝えられるようになってほしいのですから。でもこの段階では保育者の介入が必須です。一方向のやり取りを双方向に変換しなければなりません。それで私たちは“聴く”ことも子どもたちに伝えていきます。良いコミュニケーションを成立させるためには、“聴く”ことは“話す”ことよりも大切なように思います。ところが“聴く”ことは難しいのです。文字の中にも含まれていますが、“心”がそこにないと相手の言葉を正確に受け取ることができないからです。私たちは自分に都合のいいことには耳を傾けますが、都合の悪いこと、聴きたくないことには耳を塞いでしまいます。聞いているふりだけで、聴いてはいないのです。この時には声は聞こえても、言葉の中身は伝わっていきません。これは子どもたちも同じです。それで時々大人は苛立って「ねえ、聞いている?」「ちゃんと聞きなさい!」なんて、子どもたちに向かって言葉を発するのです。でも、子どもにしてみたら「だって、聞きたくないんだもん。」「そのプンプンした声、耳障り!」「聞いてもいいことなさそうだし。」そんなふうを感じる話し方を大人がしているんじゃないかと思ったりします。穏やかに、柔らかい温かい口調で、子どもの気持ちに寄り添いながら話したら、きっと子どもは“聴こう”としてくれるはずなのです。・・・と書きながら、毎日毎日、次から次へと事件が起こる子どもとの日常で、いつもこんなことができる大人なんてそうそういるはずないな、とってしまいます。そんなことを考えていたら、幼稚園でお話をしてくださった福音館の上田紀人さんが仰っていたことを思い出しました。

【子どもの心を育てる3大栄養素は＜愛情＞＜笑顔＞＜語りかけ＞です。しかし最近の子育てにはテレビやスマートフォンの影響から＜語りかけ＞が不足しています。また、その内容も貧しく、同じ言葉を多用しています。（ワースト3は「早くしなさい」「～してはだめ」「ちゃんとして」）子どもたちは「豊かな言葉の語り掛け」をあまり経験していないのです。だから是非、絵本を読んであげてほしいのです。絵本は言葉の宝庫です。それを大好きな人に読んでもらおうと、子どもたちは絵本を読んでもらっている間、読み手から「愛情」と「笑顔」と「語り掛け」を受け取ることができるのです。心の栄養を貯めることができるのです。】（紙面の都合でかなり省略してまとめています。）

私たちが子どもたちに絵本を読む時、私たちの口調は穏やかです。怒ったまま不機嫌な口調で絵本を読むことは（多分）ないでしょう。不思議なことに大人も気持ちを調べて絵本を読んでいます。無意識ですが愛情を注ぎ、笑顔で子どもを膝にのせ、その心に寄り添って同じ時を過ごしています。そして子どもは絵本の絵を読み、語り掛けに耳を傾け聴いているのです。「いつも穏やかに柔らかい口調で」話すのは難しいけれど、1日に1回、子どもを膝にのせて絵本を読むことは難しいことではありません。＜語りかけ＞と＜傾聴＞言葉を介した豊かなコミュニケーションが成立する時を大切にしたいと思います。

最後に、これは気になっていることです。この頃、書店の絵本売り場に「これは大人が喜ぶ、大人のための絵本」と思われるものが、あたかも幼児向けの絵本のように平積みで売られています。これを読んで「癒やされる」のは誰?と考えると、気付くかも。絵本を選ぶことも大切にしてほしいと思います。